

登録有形文化財

# 畑田家住宅活用保存会年報

---

No.9/2010



Sadao N.  
彼岸花 (庭の植物シリーズ5)

## <畑田家住宅活用保存会 2010 年度行事予定>

絵画フォーラム 2010年5月23日(日)

「見たものを描く喜び」 講師：新制作協会会員、宝塚造形芸術大学講師 中村貞夫

秋の一般公開と教育フォーラム 2010年11月14日

「これからの教育—変えねばならないこと、変えてはならないこと」

羽曳野市教育長 藤田博誠、同教育委員会学校教育室長 安部孝人、  
同社会教育課 吉澤則男、前羽曳野市立高鷲南中学校長 久堀雅清、  
前羽曳野市立古市小学校長 足田和男、前羽曳野市立丹比小学校長 山本清、  
大阪府立春日丘高等学校長 栗山和之、梅花学園入試担当 大友庸好

第13回畑田塾 2011年3月20日

「親子で楽しむコンサート」

ヴァイオリン 木野雅之 ピアノ 吉山 輝

第14回畑田塾 2011年5月15日

「お能ってなあに？」

能楽師 山本博通

「昔の遊び」

畑田家住宅活用保存会 畑田耕一、畑田勇、矢野富美子

## 阪神・淡路大震災 15 周年に思う

畑田 勇

平成 7 年 1 月 17 日早朝、突如として勃発した阪神・淡路大震災は、僅か 15 秒間の地震でありましたが、極めて大きな被害を残しました。専門の先生方の、スーパーコンピューターを駆使しての懸命な調査、研究、分析等によって、地震の全貌が、逐次詳細に解明されました。僅か 15 秒間の地震の中に、マグニチュード 7 程度の二つの大地震が数秒間隔で発生したために、災害も倍増し拡大したと聞いて、この地震の規模と被害の大きさに全く驚いてしまいました。

物理学者寺田寅彦先生は、随筆集の中で、「天災は忘れた頃にやってくる」と警告されました。そして、それがやってきました。環太平洋地震帯の真ん中にある日本列島で起こった地震は数多くある中で、明治以来マグニチュード 7 程度のものが約 20 回記録されております。その中で、特に物的、人的に受けた被害の突出しているものは、大正 12 年 9 月 1 日に発生した関東大震災と、今回の阪神・淡路大震災であります。

日進月歩、文明開発が進むにつれて、我々の日常生活に便利さや有益性を求めるために、安全性がやや不確実になっている場合があります。公共性の高い構造物の場合は厳しい基準を設定して安全管理されておりますが、それでも未だ充分ではないようです。

強度や安全率を高く保持しながらも、なお、阪神・淡路大震災においては、震央の部分では高速道路が横倒しになりました。関係者は勿論のこと、誰しもが驚嘆したところでもあります。

おりしも、高速道路を走行していたドライバーの恐怖の体験談を聞きました。

「車を走らせていると宙に浮いた感じで、高速道路が縦に横に波打つよ。こんな怖さは未だ経験したことは無いのよ。そして、高速道路とともに車ごと倒れ落ちたのよ」と恐怖の体験を震えながら語っておられました。

一瞬にして壊れゆく家々、親子、友達との悲しい別れ等、全く想像もしたことの無い数々の悲痛な体験をしたある児童は、たまらなくなつて叫びました。

「かみさまのいじわる！！！」

幼い子供の最大限の恐怖の表現であったのでしょうか。

## 平成 21 年度 事業報告

1. 音楽フォーラム 6月28日  
和の静寂で聴くオペラのアリアとリストのラ・カンパネラ  
ソプラノ 畑田弘美  
ピアノ 吉山 輝
2. 畑田家住宅見学会 9月14日  
羽曳野市立丹比小学校 4年生
3. 畑田家住宅見学会 9月17日  
羽曳野市立植生南小学校 4年生
4. 畑田家住宅を描こう 11月9日  
親と子供の写生会
5. お茶と日本人の心 11月14日  
武者小路千家家元 千 宗守
6. 秋の一般公開と文化フォーラム 11月15日  
奈良の風物詩—千年の時代を照らし出す  
春日大社の万灯籠を中心に  
石仏研究者・元毎日放送  
テレビプロデューサー 石濱俊造
7. 第 12 回畑田塾 3月21日  
「クモの糸の不思議」  
奈良県立医科大学教授 大崎茂芳  
「畑田家を探検してみよう」  
大阪大学名誉教授・畑田家当主 畑田耕一  
一級建築士 石井智子
8. 出版  
「インターネットを正しく使うには」  
(出版シリーズ No.7)  
大阪大学名誉教授・前大阪大学総長 宮原秀夫

## 役員

- 会 長 畑田 勇  
副 会 長 甲斐学、中村貞夫、畑田拓男  
事務局長 畑田耕一  
幹 事 石井智子、奥田 寛、織川久子、  
笠井敏光、畑田弘美、矢野富美子  
会 計 畑田庸雄  
会計監査 澤田秀雄、塚本昭光

## 新正会員

池上和彦	金 明眠	鷹野絵里
高橋祐子	谷口壽一	畑田昭雄
原 直樹	藤田佐智子	宮本光信
向山裕子	山岸恒雄	

## 新特別会員

石濱俊造	大崎茂芳	千 宗守
宮原秀夫		

<彼岸花>強い朱色、デリケートな線と形を敬遠して来ましたが、納屋の裏側に群生している彼岸花をスケッチしてみました。近年、不順な天候ですのに、彼岸のころに時を合わせて咲くのは不思議です。(中村貞夫)

本年の行事に参加していただいた方々からの感想文  
第11回畑田塾(2009年3月22日)

「畑田家住宅を描いてみよう」

洋画家・宝塚造形芸術大学教授・新制作協会員 中村貞夫

「インターネットを正しく使うには」

大阪大学名誉教授・前大阪大学総長 宮原秀夫

午前中の写生の時間は、普段身近でない日本の伝統的な家屋をよく観察することが出てきたので、とても有意義な時間だった。午後の講演「インターネットの正しい使い方」で感じたことは、どれだけ技術が発展しようとも、結局使う人間の倫理や道徳といったものが非常に重要であるということだ。コンピュータウィルスや悪質サイトが増え続けるのも、正しく使えば非常に有用で便利なツールであるインターネットを悪用しようとするからである。また、ネット掲示板での誹謗中傷が絶えないのも、インターネットには匿名性があるから何を言っても平気、という考えが根底にあるからであると思う。宮原先生はインターネットの普及した現代に必要なのは、フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションであるとまとめられた。私も、その通りであると思うとともに、今後もインターネットを介したコミュニケーションの際には、画面の向こうには人間がいるということを常に意識しようと思う。

また、講演の後半には最先端情報技術の一例として、入力された日本語・英語・中国語音声の相互翻訳システム、音声による検索システムが紹介された。これらはまだ実験段階だが、実用化されれば海外旅行や情報の検索が非常に楽になるものと思われる。市販の音声認識ソフトのような声の登録無しに、自分の音声認識されることには非常に驚かされた。是非、自分の言いたいニュアンスがきちんと訳されているのかを知りたいと思う。

(東京大学教育学部附属中等教育学校6年 友國亮介)

ぼくはきょう、おじいちゃんと、えをかきに行きました。にわのまつのきや、くりのきをかきました。ひるからのじかんはインターネットのおはなしをききました。日本ごでいって、中ごくごでつうじるインターネットにとってもおどろきました。さいごにしゃしんをとって、しょうじょうをもらいました。またいきたいです。(渡利洸太 7歳)

畑田塾は対象が原則小学5年生以上となっているが7歳の孫とともに参加した。畑田家の古い木造住宅の雰囲気になにか大切なものを感じ取ってほしかったからだ。府営団地で暮らしている孫にとって、庭のある古い家で過ごす時間はきっと彼の記憶に残り人生の原体験のひとつとなることだろう。インターネットが通訳もする、そんな現場を見

て驚いた孫の姿が嬉しい。(洸太の祖父・神野武男 59歳)

参加者のたぶん最年少、新1年生の孫と参加した。まず第一声、千と千尋のカマドや!! アニメ時代、マンション住まいの孫の知識からすると、現実の家の中にカマドが存在する事に衝撃を!これに火が入って現在も使われていたなら又、又 ショックだったと思います。年代を超えた、お姉さん、お兄さんの中に入って何かする事、今回は絵を描く、お話を聞く、同世代の中での動きと違って、彼女にとって新鮮だった様で、「また行く、ジジイ今度は何時?」分からないコンピューターのお話の時、ゴソゴソしていたのが嘘の様です。主催者、講師、スタッフの皆様良い時を有難うございました。次回を楽しみに。(宝塚市 谷口壽一)

暗い倉庫で書いたのが楽しかった。珍しいものがたくさんあった。(大阪市立苗代小3年 仲村 太一)

太一は、広い敷地の中でどんな変わった物を描こうかと色々探していました。気温にもめぐまれて、次々に描いていました。3枚描きましたが、まだまだ描きたかったようです。(仲村太一の母 仲村理恵)

「畑田家を描こう」ということで、私は、建物のことしか頭に無かったのですが、孫がいきなり、床の間の掛け軸を画面いっぱい描き出したのには、驚きました。子供の描きたいという興味は、大人の固定観念とは違って無限にあり、伝統的建築物は、その建物だけでなく、その中の調度品についても大切なものであると感じました。私も久しぶりに、建物のスケッチをしました。写真でパチリというのではなく、手を動かすことにより、鬼瓦のデザイン一つにもその家の繁栄と幸福を祈る職人さんの願が込められていることに気づかせて頂きました。

宮原先生のお話を聞いて、この20~30年の間にツールであるパソコンやインターネットが無くてはならない社会システムとなりましたが、これを人類の平和と幸せに役立たせるかどうかは、結局、人間の道徳感に帰するということが分りました。現在、そのツールが拝金主義のために多く使われているのは、数字は分りやすいということに帰すると思いますが、道徳は、それを超えた「他のために自分は何ができるか」というところにあると感じます。言語変換については、ここまで進んでいるとは思いませんでした。言葉の壁を乗り越えて人類の平和に役立つツールであると思います。(仲村太一の祖父 寺西 興一)

いい絵がかけて楽しかった。インターネットのお話はむつかしかった。(奥田響生 5歳)

自分が描きたい、好きな絵がかけてよかった、楽しかった。また、このような催しがあれば参加したい。インター

ネットのこと、はじめお話がむずかしいと思ったが簡単でわかりやすかった。パソコンのインターネットをうまくやるコツが解った。やってみたいと思った。

(堺市立黒山小 2年 奥田琴乃)

リラックスした雰囲気の中で、楽しく描くことができました。誰の顔も生き生きしていた、参加人数も多く時間的余裕がなかったように思われましたが、一言アドバイスをいただけたら、励みになりよかったですと思います、また企画してください。(響生、琴乃の祖母 奥田晃枝)

インターネットのこと、はじめから易しく話していただいていたへんためになりました。メールは電話などと異なり一方向通信であり、しかも電話のように音声、感情等のこもらない、ただパケットが届いて文章に成るだけなので、双方向通信とは異なり何でも書けるので、人を傷つけてしまうようなひどい文章もメールなら送ってしまう。だからといって、メールやインターネットを利用しないと言うわけにはいかない。メールやインターネットの持つ大きな可能性を知り、自らの道徳性と人に対する尊敬の気持ちで、この道具を使いこなしていかなければならないことを痛感いたしました。メールの書き方も、読む人の気持ちを考えて、もっと慎重に書くべきだと、考えを新たに致しました。いい勉強になりました。(響生、琴乃の祖父 奥田 寛)

先ず、午前の「畑田家住宅を描いてみよう」、あれだけヴァリエティーに富んだジェネレーションが集まって、一つのモチーフをスケッチするというのは、世にも稀なすばらしいことであつたと思います。私も、その一員になれたことがまずうれしかったです。同級の谷口さんのお孫さんとも仲良くなれ、おなじ画用紙に互いに相手の肖像画を描くこともできました。こんな集まりを分け隔てなく指導されるのは、中村先生ならではと思いました。私は、この立派な家の豊の美しさを描きたいと思いましたが、ホームページでみなさんがどんな絵を描いたのか見るのが楽しみです。午後の宮原先生のお話は、世界の最前線を走り続けてこられたオーソリティーが、最先端のテクノロジーを駆使しつつ、現代の苦悩と人間の進化の可能性を論ずる。それを、スクリーンの裏からは仏壇に居並ぶご位牌が耳を傾け、右上の神棚からは日本古来の神々が眺めるという伝統的かつ神聖な空間でなされたのである。特別な時空を経験させていただいたという感動があります。ご当主のおっしゃることの中からノーベル賞受賞者が何人か出てもおかしくないとお言葉が少し分かるような気がいたしました。そういう意味で、質疑の時間に若い小・中学生たちの意見を聞いてみたい気がしました。あつけらかんとした未来が覗けたか

もしれません。

(山岸恒雄)

### 和の静寂で聴くオペラのアリアとリストのラ・カンパネラ ソプラノ畑田弘美—ピアノ吉山輝(2009年6月28日)

伝統的な日本建築の中で西洋の音楽を聴くことにより、西洋音楽の揺籃期に日本人がどのように西洋音楽を文化の中に取り入れていったか、その知恵と情熱を垣間見るようなコンサートでした。聴く立場としては余分な残響が少なく、通常の演奏会よりも音楽の中身に集中できたような気がします。このような演奏会によってオペラに親しむ方がより一層増えてくれればと思います。(愛知県 石山雅規)

日本家屋での、オペラは2度目です。2年前の畑田塾で、日本家屋は音響工学的に残響が少ないことを学びました。今回、畑田さんに分かりやすく歌劇を解説していただき、残響の無い声とあいまって、ストレートに理解して、感じる事が出来ました。歌劇は、詩を語りかけるような口調で、分かりやすく伝えるものであると思いました。

(日本合成化学 浅野育弘)

夫婦とも還暦を過ぎ、自分のお気に入りのアーティストの公演に別行動で参加する機会が多い中、久しぶりに揃っての鑑賞でした。いつもはあんなに近くで聴くことのない名曲を聴かせて頂き感謝します。曲も私達の馴染みの選曲で嬉しかったです。(羽曳野市 中西叡子)

I have been impressed by what I saw when I first arrived the house. That is, all the family members, from little children to old grandfather, were working hard for this program. I have few chances to see this picture in Japan as well as in China. I do not know in Japanese family if this working picture is normal or not. However, nowadays in China, the children who help family become fewer and fewer. Not only because of the problem of children themselves, in my opinion, the family's people (parents and grandparents) should take more responsibility to educate the children. (For elders, in fact, Japanese people are much healthier than Chinese people. I was so surprised when I first saw the sixties driving car in Japan.)

And this is the first time for me to enjoy the concert in such close distance with executant and singer, more interestingly, it was in the traditional Japanese house. Although it was a pity that I could not look around the house this time, the concert scene was very nice to enjoy the music because of the bright room and nice courtyard

out of the room. I am so sorry that I did not understand the opera in 100% because of my poor Japanese language, but according to the explanation and the wonderful performance of singer, I was moved and inspired. Of course, I became eager to see the opera. I felt that the performance showed that we should have a belief in our life.

(大阪大学理学部 袁厚群)

### お茶と日本人の心 武者小路千家家元 千 宗守 (2009年11月14日)

利休の茶室空間は日本の伝統的建築空間の中で、何故異質なのかということが学生時代以来分らないままで過ごしてきた。千宗守さんの「千利休は教科書などに芸術家と載っているが、そうではなく政治家である」という冒頭のお話は、建築家にとって一瞬にしてこの謎を解くととても興味深いものであった。これは衝撃的な話だが、今まで茶の湯を情緒的に解釈していたので、そういう面ばかりではないということを即座に悟ることができた。



日本と西洋の伝統的な建築をおおまかに比べると、日本の建築は木造で柱や梁などの軸組みからなる構造であるため、寝殿造りや書院造りなどに見るように柱と柱の間を開口部とする開放的な建物である。一方、西洋の建築は石やレンガからなる組積造のため壁が多く、窓はそこに穿たれた穴としての開口である。そのため、日本の建築では、大きく開いた開口を通して室内は庭へと続き、内と外の境界は曖昧で四季折々の自然の移り変わりを部屋に居ながら楽しむことができる。これに対して、西洋の建築には壁に守られた室内があり、内と外は、はっきり区別される。以上のようなことが建築界でよく語られる話であったが、こういう系譜の中で、何故利休の茶室のような外と隔絶した空間が突如現れたのかはどうか考えても分らなかった。利休は西洋の船のキャビンを見たことがあり、茶室はそれをヒントにして生まれたのではないかと推測する意見もあったが、それでも何故かという答えにはならなかった。ところが、

千利休が最後にお茶を呈したのは徳川家康であり、その日のただ一人の客だったという話から、密談の空間だと理解すると利休の茶室空間はそれにぴったりの空間なのである。

しかし、妙喜庵待庵に代表される利休の茶室空間の革新性と芸術性は、やはり「利休は偉大な芸術家である」ことを示しているといっても決して過言ではないと思う。

(建築家 石井智子)

畑田塾の文化フォーラム「お茶と日本人の心」に連れ合いとともに参加しました。このフォーラムで、参加されたお茶人に混じって作法をわきまえない私にも“お茶”がもてなされ、さらに武者小路千家家元・千宗守さんのお話をうかがい、その後に直接にお話もできたという夢のような体験をさせていただきました。

茶の湯には、究極の空間、一畳半の茶室で楽しむ二人だけの茶席もあれば、多くの人たちの人間模様を織りなす大茶会もあります。また、戦国時代にあったように「あすは敵同士」が狭い茶室で肩を並べる茶の湯や、大東亜戦争の終結への歴史的関与のあった茶会など非日常の領域もあれば、生活文化の一部として日常の付き合いを楽しむお茶もあります。このようなお話を聞いて、茶の湯というものは、実に多種多様なコミュニケーションの場であるということを学ばせていただきました。

今の情報化時代、特に若者達に、直接の生の会話や対面でのコミュニケーションが欠如しているといわれています。この時代にこそ、臨濟義玄の説いた「且坐喫茶(しゃざきつさ)」を現代版コミュニケーションツールとして具現化し、活用してほしいと、個人的には思います。(NPO 法人科学と市民社会のコミュニケーション・理事長 北浜榮子)

武者小路家14代目家元 宗守様と云えば、皇族か大名なら徳川御三家の殿様に相当する方と私は思っております。羽曳野市の登録有形文化財畑田家でのフォーラムで拝謁できてとても感激しました。私の友人にも茶道の師匠がいますが、彼は十徳姿で国内および海外を活発に往来しています。しかし宗守様は彼のイメージとは全く異なるものでした。わかり易く話され、とても気さくに接して下さいました。しかし話の中に、作法、詩歌、俳句、陶芸等の風雅の道に関する話が全く出ず、代わりに宗守様独特の日本史の話、歴史観に終始しました。茶の湯の起源は「曹洞宗の修行僧の眠気醒ましに用いたお茶だ」ということでした。「千利休は茶人と言うよりは、堺出身の政治家いわゆるフィクサーであって、豊臣秀吉に徳川家康を暗殺するよう命じられたが応じなかったため切腹を命じられた」、「当時は、堺は日本の物流の90%を担っており、主な商品は武器(鉄砲)

だった」、「堺には、秀吉の軍に匹敵できる位の、強力な精鋭武士のみで構成される自衛軍があった」、「利休の没後に子、少庵は津軽に流され家は断絶状態だったが、徳川家康の代に赦されて家は再興した。しかし政治への関与を嫌い幕府への仕官は断った。利休の孫、宗旦が還俗した後に3人の子（宗守、宗左、宗室）が独立して、以後それぞれ武者小路家、表千家、裏千家として現在に至る」等々高校の日本史では習わないいわゆる特ダネ内容を話されて、とても興味を覚えました。話の終わり近くで、御尊父様（13代家元）が、近衛文麿氏の大東亜戦争を終結に導くための手順を相談された茶会を世話された時の秘話を熱を込めて語られ、茶道が日本史に強い影響を与えてきたことを実感しました。話される歴史観のすべてに私が成る程と同意できて、楽しくお聞きしました。ともあれ、これらの話を家元ご自身から伺えたことは大層意義深いと感じます。

ここで私なりの解釈・注釈を示しますと、①宗守様によれば「茶の湯」は風雅の道・芸術というより、人々の心を繋ぐコミュニケーションの手段だった、②狭い場所・少人数という特殊性を生かして（種々の目的）密談等の会合に世間で頻りに利用された、③国政関連や歴史上重要な茶会の資料は貴重な骨董品やメモリアルとなって後代に保存される傾向にある、例えば、大石内蔵助が討ち入りの相談をした茶室と茶器、中曽根総理がレーガン大統領を接待した部屋と茶器、等々、④女性が和服姿でお茶を学ぶようになったのは明治後期に学校教育に作法として取り入れられて以来だそうです、⑤今後学校教育に取り入れるとしたら、人格形成、作法、聞き上手および話し上手になる技術の取得に力を注ぐ必要があると思います（③④は調査結果、⑤は筆者の私見）。（大阪産業大学講師 北浜克熙）

茶道の基本的な知識から始まり、茶の湯の歴史、特に利休と政治にまつわるお話は大変勉強になりました。機会があれば是非、茶道の形式美の奥に潜む、茶の湯の極意、日本人の美意識の本質にかかわる部分のお話を聞いてみたいと思います。（豊中市 服部敬弘）

「茶会にお誘いする時、本来は列席する方の名前を皆書くのですよ。戦国の世で、思いもよらず緊張関係にある人と同席してはいけないから」と学生時代に堺のお茶の先生に教えて頂いたことを、三十年ぶりに思い出しました。

（堺市 松尾亨子）

堺の住人としては、返す返すも「千家」が京都に行ってしまうのが残念です。「文化」そのものが堺からなくなってしまったようで。お茶の先生は居られても、お茶人さんが居られないとでもいうのでしょうか。そんなえらそう

なことをいう私は、若い頃お茶をかじっただけで、海外に旅茶碗のセットを持参して、お点前をして、外国の方に飲んでいただいたりしています。とても喜んでくださるし、私もお茶を楽しむのは好きです。しかし、いい加減な形で日本文化を紹介していることに反省しきりです。お家元のお話を伺って、もっと深くお茶を試してみたくなりました。また、「利休」の政治的な立場は講演や書物などで、認識していましたが、昭和の大戦での密談の話は驚きでした。江戸時代や明治時代のことなど、茶道のことなどもっとお聞きしたいことが尽きません。（堺市 兒山万珠代）

### Impression of Tea Ceremony of Japan in Hatada House

In the beginning when we learnt Japanese language, we have known two traditional culture of Japan. One is Ikebana, the other one is Tea Ceremony. Although we long for learning it, we have never thought that we would have a chance to experience the real formal Tea Ceremony of Japan. Fortunately, after four years when we came to Japan, we are honored to be invited by Prof. Hatada to join the Tea Ceremony of Japan in Hatada House. We enjoyed the tea ceremony very much, and the Japanese cake and the tea are very delicious.

Japanese people are famous for the politeness. The Tea Ceremony also reflects the politeness profoundly. Because of the poor Japanese language, before starting the Tea Ceremony, we have practiced what should we do in case we can't follow the explanation. But we still felt nervous in such formal occasion.

In fact, tea has a long, long history in China. Tea is one of important seven things for Chinese people. These seven things are “柴、お米、油、塩、醤油、酢、お茶”. So there is also Tea Ceremony in China but we have not attended it. To make good taste tea, the tea itself, the water we use, the fire, the tools for drinking, and so on are very important. In China, we say “品茶(Pin Cha)” for “drink tea in the ceremony”. The most important thing is “品(Pin)”, I can not find a proper word for “品(Pin)” in English. Maybe it means how to drink, or how to taste, or how to think and what we think. This is a good chance for us to learn traditional culture of Japan. Thank you very much.（大阪大学理学部 袁厚群、鮑光明）

I had a great opportunity to enjoy a cultural talk given by one of the renowned Japanese tea masters, Mushakouji Senke, about Chanoyu. Since I am not fluent in Japanese, I tried to

remember some keywords from the speech and searched for them in the literature. Tea was primarily used as a medicine to cure diseases and believed to promote long life. It was first introduced to Japan from China with Zen Buddhism in the sixth century. Chanoyu which is referred to as the Japanese tea ceremony is a ritualized way of preparing and drinking tea which was perfected in the latter half of the 18th century by Sen-no-Rikyu. It was inspired by Zen and continues to reflect the Zen ideals of aestheticism, peace, harmony and discipline. The Zen spirit is incorporated in many aspects of Chanoyu. In fact, it might even be said that Zen thinking lies at the heart of Chanoyu. Hence, the tea ceremony equals a path towards quietness and meditation for the guests who come from their daily routines. Before the guests enter the room prepared for the tea ceremony, they walk through the garden and clean their mouths and hands with water from a stone basin. Doing this, they symbolically clean heart and soul and rid themselves off all impure thoughts, then they proceed to the tea room. The literal meaning of Chanoyu is hot water for tea. In fact the tea's taste is at maximum when it is prepared with fresh water. Tea is made from steamed and dried tea leaves ground into a green powder called matcha(抹茶) which is rich in vitamin C and minerals. Hot water is added to the powdered tea in a vessel and whisked rapidly. Every single thing that is used in a tea ceremony has a meaning. Chanoyu is not only drinking tea, but it encompasses every aspect surrounding tea, such as the structure of tea room, space, flowers, four seasons, silence, or a hanging scroll with a painting or a work of calligraphy describing, for example, a method of pouring hot water. When preparing to welcome a guest into a tearoom, the host must think carefully about the choice of each item, including the tools for making tea, the scroll to hang on the alcove, and the flowers to decorate the room. So the host needs to have a broad knowledge of utensils and fine art, as well as a refined sense of aesthetics. The tea bowl is the focus of the tea ceremony and happily unites the guests and host spiritually. The guests are welcomed heartily and the social gathering is enjoyed without any disturbances from the outside world. The tea is also prepared before the eyes of the guests, which only reinforces the enjoyment of the wonderful taste of the tea. Therefore the tea ceremony facilitates the communication between all participants amongst each other in which the host or tea master are included. Chanoyu does not mean just drinking tea. Tea is a symbol which expresses the essentials of the Japanese mind and thought. It

represents Buddhism, psychology and mentality of the Japanese, and so on. In other words, the tea ceremony represents the different aspects of primary character of the Japanese. Finally I wish to thank Prof. Hatada for providing me this unique chance to get more familiar with traditional Japanese customs and enjoy the event. (大阪大学理学部 S.M.A Haghparast)

### 奈良の風物詩—千年の時代を照らし出す春日大社の 万灯籠を中心に (2009年11月15日)

石仏研究者・元毎日テレビプロデューサー石濱俊造

万灯籠は、街道を明るく照らす照明器具の一つで、現代の街灯に相当するものです。形も様々で、春日型や雪見型といった形があります。周辺の風景になじむような、芸術性も兼ね備え、観賞目的で設置されるものも存在します。

今回石濱さんの研究で、万灯籠に刻まれている文字に上記以外の価値があることを紹介していただきました。刻まれた文字を読み解くと、その時代の庶民の暮らし、人間関係や時代を読み取ることができ、歴史を記す巻物のような側面もあることが理解できました。万灯籠は、単に照明や観賞目的でなく、幾世紀も経ることにより、石に刻まれた文字は、後世に伝えていくメディアとしての重要な役割が出てくるというわけです。今後その時代の庶民の歴史を伝える目的で、万灯籠の保存を望むところであります。

(日本合成化学 浅野育弘)

奈良を訪れたとき、春日大社の参道に並ぶ色々な時代と形の灯籠を幾度も目にしていた、興味深く思っていました。拓本の資料をもとにした石濱先生のお話は具体性があり、絵解き、読み解きを面白く聞かせていただきました。参加者の中には文字の解読に詳しい方も居られて、自分の知らないことが沢山あると実感しました。十数年にも及んで、三千基を超える灯籠を調査、研究されたことに感心しました。石の灯籠に刻まれた絵や名前や建立の年月から、人々の深い祈りや願いが伝わってきました。石は思っているほど堅固なものでないことも、永年の風化で文字が読みにくくなっていることからよく分かりました。拓本の絵の入った葉書のセットは趣きがあって、知人への通信に活用させていただきました。(洋画家 中村貞夫)

### 第12回畑田塾 (2009年3月22日)

「クモの糸の不思議」奈良県立医科大学教授 大崎茂芳

「畑田家を探検してみよう」 畑田家当主 畑田耕一

一級建築士 石井智子

この行事の感想文は編集の都合上、次の年報に掲載します。

## 国民学校入学

昭和16年(1941年)4月、筆者は大阪府南河内郡丹比村の丹比国民学校に入学した。同年3月、国民学校令が勅令として出され、4月1日からそれまでの尋常小学校、高等小学校は国民学校と改称され、われわれ小学生は、児童・学童でなく「少国民」とよばれることとなった。そして、その年の12月8日、日本は、真珠湾攻撃に始まる大東亜戦争(太平洋戦争)に突入した。その日の朝、担任の先生が黒板に大きな字で「米英」と書かれたのを今も鮮明に覚えてはいるが、1年生の筆者には、この戦争の意味はよく分らなかった。

開戦当初は、ラジオや新聞は日本の南方戦線における赫々たる戦果を伝え、それによって得られたゴムで作ったという軟式テニスのボールが、翌昭和17年の夏に、生徒に配られ、また、当時は貴重品であったゴム底の運動靴の特別配給があったりして、戦争に勝つとは有難いことだなど、思った記憶がある。因みに、その頃の小学生の履物は、主として下駄か藁草履であり、体操は裸足でやっていた。

## 戦中戦後の窮乏生活と生活の工夫

しかし、そんな有難い時期は、そう長くは続かなかった。昭和18年5月には米軍がアッツ島に上陸して日本軍は全滅した。この時から「玉砕」という言葉が使われるようになったのだと思う。それでも、日本の陸軍および海軍の最高統帥機関であった大本営は、多くの戦場で日本軍の赫々たる戦果を発表し続けたが、それとは裏腹に、日々の生活は少しずつ、窮乏していった。自転車、建具、金物、農業機械などを扱う技術者を除いて、大部分が農業を営んでいた筆者の村では、食べ物に困ることは無かったが、都会では、白いご飯が麦飯、お粥、雑炊と変化し、最後には、米粒の殆ど入っていない水のような雑炊となり、弁当箱は広口の空き瓶となって行った。

戦争に必要な食料の供給は、通常の田畑だけでは間に合わなくなり、荒地を開墾してサツマイモを植えるようなことも、銃後の国民の重要な仕事となり、われわれ「少国民」も授業を止めて、開墾に行く日が多くなった。そうして作ったサツマイモは、芋の部分だけでなく、蔓も「お浸し」にして食べることとなる。溜池のフナや鯉、家で飼っている鶏とその卵は貴重な蛋白源であったが、戦争末期には田圃で取れるイナゴも食べた。このような食糧事情は、戦後もかなり長い間続いた。大阪市の四ツ橋に空襲の被災を免れてぼつんと建っていた電気科学館(現大阪市立科学館)でプラネタリウムの投影と洋画を見た後、持参した白いご飯で作った握り飯を、ものかげで、父と二人で、人に見られぬようこっそりと食べた記憶は未だに鮮明である。

物の不足は、戦争中も戦後も、食料だけではなく、あらゆるものに及んだ。夜の停電はしょっちゅうであった。乾電池のようなものは、殆ど入手出来なかったので、灯かりはロウソクに頼るしかなく、昔から家にあった龕灯(ガンドウ)が随分役に立った。これは、ブリキで作られた釣鐘形の外枠の中に、自由に回転する錘つきのロウソク立てを取り付けたもので、起き上がり子法師の原理を応用した提灯ともいえる。本体がどちらを向いていても、中に取り付けたロウソクは上を向いていて、火が消えない仕掛けである。いわば、ロウソクを光源とする現在の懐中電灯である。子供の頃これに火をつけて、あちこちで暗闇を照らすのは嬉しかった。物資不足の時代にロウソクを懐中電灯と同じように使えるのは感動的でさえあった。

戦争末期には、ロウソクも貴重品となり、停電の夜は、ローソクは非常用として温存して、寝るしかなかった。マッチがなくなったときのことを想定して、火打石ともぐさで火を起す練習をしたりもした。「欲しがりません、勝つまでは」という標語があちこちに張られていた。

## 物の無い時代もまた幸せ

当時の真空管式ラジオを、停電時に電気無しで働かせることは勿論不可能であったが、幸いなことに、真空管式のラジオの前に使っていた、電気の要らない鉱石ラジオがあったので、それを使って、ニュースなどは聞くことが出来た。ここで、戦争末期におけるラジオにまつわるもう一つ的话题を記しておく。それは、アメリ



カの放送である。この放送は、日本の大本営発表とは異なり、戦況の真実を伝えていたようである。それでは困るということで、その放送が聴取できる夜になると、訳のわからない妨害伝波が出されるようになり、夜になると放送が聴けなくなった。妨害電波の影響を避けて必要な放送を聴くには、可変コンデンサーとスパイダーコイルを組み合わせた高周波同調回路をつければよいことが分った。龕灯（ガンドウ）の掃除もそうであるが、いわゆる機械ものに関する仕事は、父が出征中で、母と子だけの我が家では小学生の筆者の仕事であった。この頃の経験が、筆者を自然科学の道に進ませる切っ掛けになったと、今思っている。中・高校生の頃は、日本軍の放出物資の双3極真空管を用いて作った短波ラジオで、外国放送を楽しんだ。大学に入って、5球スーパーヘテロダインのラジオや東京通信工業（現在のソニー）が日本で始めて製造した高周波トランジスターを使った小型携帯ラジオを作って、学費の足しにしたりした。ラジオを作るのに必要な計測器なども全て自作であったし、モーターを缶詰の空き缶とエナメル被覆線で作ったりして楽しんでいた。望遠鏡や顕微鏡もレンズだけ買ってきて、自作した。完成品をただ使うのではなく、自分で作って使う、それもキットを買ってきて組み立てるといような作り方ではなく、自分で何をどのように作るかを決めて、材料を集めて作って使うと、そのものの作動原理が良く理解できる。物の無い時代の子供は幸せだったなど、今にして思う。

当時、秤といえば、棹秤か、その原理を応用した台秤が主流であった。我が家には100gから100kgぐらいまでのものを、それぞれ量ることの出来る秤がいくつもあった。医者のお伯父から貰ったフェナセチンという風邪の特効薬を、小さな棹秤で一服分ずつ量って薬包紙に包むのは筆者の仕事であった。この棹秤の原理はきわめて明解で、小学生にもその原理はよく分ったし、これを一度でも使っておれば、学校の授業で出てくる梃子の原理は簡単に理解できた。学校の授業と日常生活との直接の結びつきは、子供の教育に非常に大事である。子供に日常生活で電卓を使わせるのが悪いとは言わないが、それと同時に、ソロバンや計算尺も使わせておいた方が、物事の根本原理の分かる、あるいは、根本原理を探ろうとする人間に育つのではなかろうか。

### 戦争一色の生活の中で

ところで、戦況は上に述べたアッツ島玉砕の頃から次第に怪しくなってきた。それにともなって、学校の授業も次第に様変わりし、体操の時間には海軍の兵隊の体操を子供向けに作り変えた海軍体操なるものやることになり、アメリカ兵が上陸してきたときの本土決戦のためにということで、藁人形を竹やりで突く練習や手榴弾を投げる練習も加えられた。航空兵になる訓練ということで、鉄あるいは木で作った大きな環の中に入って運動場を転がる訓練もあった。「行け大空へ、御国の少年」は「少年航空兵に応募しよう」と少年に呼びかける標語で、同じクラスの女生徒が何かの懸賞に応募して、入選したものであったと記憶している。まさに、戦争一色の授業であったが、体操の先生から、「皆が勢いよく足踏みをすると、地球の反対側に居るアメリカ人が地震かと驚くから、一所懸命やれ」といわれると、いくら子供でも「まさか」という気になったし、「敵が本土に上陸したときには、最後の兵になるまで戦って国を守れ」といわれると、「それでは、最後の兵が殺されたあと、日本の国はどうなるのだ」という考えが脳裏を掠めた。

そして、大都市へのアメリカの爆撃機B-29による空襲が始まった。敵機が近づいてくると、先ず、警戒警報が発令され、さらに近くなると空襲警報となる。授業中に警報が発令されると、われわれは直ちに隊列を組んで家に帰って、庭に掘った防空壕に入る。警報解除で再び学校に戻る。そんな中で、上に述べた開墾に行ったり、草刈をしたりということもあって、4年生になるともう授業どころではなかった。ついでながら、この草刈は、農業の手伝いではなく、その草を粉にして戦闘機のパイロットが戦線に赴く途中で、居眠りをするのを防ぐために嘔吐チュウインガムの添加物にするのだということであった。物資の窮乏は極限に近く、「屁もまた燃えるものなれば、これを使わざるべからず」と言った陸軍の偉い人がいて、兵隊にサツマイモを食べさせて風呂に入れ、屁を水上置換で集め、屁の燃焼実験をしたところ燃えなかったので、尻から出た屁に直接マッチで火をつけようとしたが、やっぱり燃えなかった。でも、それでは実験台にされた兵隊が余りに可哀相なので、「燃えた、燃えた」と言ってすませたという話を、戦後に何かの本で読んだ記憶がある。この実験が失敗に終わっ

た理由は、サツマイモの尻には可燃性成分が少ないためと思われるが、この実験が若し成功していたら、陸軍はどうするつもりであったのだろうか。戦争中の過酷な生活の中の、ユーモラスな一こまではある。当時の兵器の一つに風船爆弾というのがあった。気球に爆弾をぶら下げて上空に上げ、アメリカの上に来たときに気球がしぼんで、落下するという仕掛けである。その気球を作るための紙を貼り合わせる作業場がわれわれの学校からあまり遠くないところであって、貼り合わせ用の糊をわれわれの工作用に分けてもらったことがある。この爆弾は、尻を燃料にする実験よりは、ほんの少々効果があったようである。

筆者の住んでいた丹比村は、先にも述べたように農業地帯の田舎で、都会の生徒が疎開してくるような場所であったので、警報は出ても、実際に空襲を受けることは無かった。一度だけ、警報で家に帰る途中、何かの理由で迷い込んだと思われる艦載機に襲撃されたことがある。爆音に振り向くと、風防メガネをかけたパイロットの顔が目飛び込んできた。とっさに、皆と一緒に堤防に伏せた。何発かの銃弾のうちの一発が、土に伏せた筆者の右手の近くを通った。このときだけは、「鬼畜米英」という言葉がパイロットの顔と重なった。

夜、大阪市が爆撃されるさまを遠望することが時々あった。焼夷弾が雨あられと降るさまは、さながら、花火大会のようであった。時たま、日本の高射砲の玉が打ち上げられるが、爆撃機の遙か下で破裂して全く効果が無い。高射砲の砲弾は、飛行機に当たらずにそのまま下に落ちてくると、味方に爆弾を落としたのと同じ結果になるので、敵機の高さをあらかじめ測定し、その近くまで上がったときに炸裂するように仕組まれている。この頃は、そのような砲弾を作るのに十分な金属材料が既に無く、上空を飛ぶB-29爆撃機に当たらないことは承知のうえで打ち上げていたのだとは、日中戦争のときは中国で高射砲隊の隊員をつとめ、大東亜戦争のときは中部軍司令部に勤務していた父の話である。実際、戦争に使うので家にある宝石や金属は出来るだけ供出せよという御触れが出て、金属で出来ているものは蚊帳のつり手にいたるまで役場に持参したのを覚えている。

### 世界の平和のために勉強せよ

この様な状況のもとで、なお、日本が戦争に勝つとは、考えにくかった。それを口にするものはほんの少数であったが、筆者のまわりには居た。当時、大阪大学工学部の教授であった伯父は墜落したアメリカの飛行機の調査の結果から、これだけの技術を持つ国に日本が勝つことは不可能と断じていた。私立中学の先生をしていた祖父の弟は、新聞社のニューヨーク特派員をしていた頃の体験から、この戦争に勝つことの困難さを教壇から生徒に話し、周りの人たちははらはらさせていた。それでも、戦後の日本の将来を案じ、それに備えるような能力は、10歳の小生には無かった。ただ、ただ、無いもの尽くしの日々を、いろいろな工夫をしながら、敵機の空襲を心配しつつ送っていた。そんな折、終戦の約2ヶ月前の梅雨の雨の日、周辺の国民学校の先生方を招いて、われわれ丹比国民学校の全校生徒による海軍体操の参観授業が行なわれた。雨の中でずぶ濡れになりながらの体操であった。全てが終わったあと、検閲に来ていた陸軍の中尉さんが壇に上がり、「君達は非常に上手な体操を見せてくれた。私は大変心強く思った。しかし、体操も大事だが、勉強も一所懸命にやってくれ。戦争が終わった後の世界の平和のために」と言われた。先生方には思いもよらない一言であったかも知れないが、体操はあまり好きでなかった満10歳の筆者は、兵隊さんがもっと体操をやれと言うのかと思っていたら、勉強しろと言われたので、大変嬉しかった。「平和のために勉強せよ」という言葉の意味は、正直なところよく分らなかったが、言葉そのものは、しっかりと覚えておいた。そして、後年、これがおそらくは日本が間もなく歩むはずの道をすでに見通していたこの中尉さんの、われわれ子供への必死の一言であったのだと思うようになった。終戦の2ヶ月前に、戦後の日本の進むべき道を、公開の場で子供たちに明確に示してくれたこの兵隊さんの言葉は今も忘れない。

### 今、日本人が考えねばならないこと

昭和20年8月6日広島に、9日長崎に原爆が投下されて大きな被害が出た。これが並みの爆弾でないことは、すぐに分った。そして、8月15日の正午、昭和天皇による終戦の詔勅の録音が放送された。その内容は聞き取り難かったが、日本の無条件降伏で戦争が終わったことは、直後のアナウンサーの解説で分った。戦争に負け

たという無念さはあまり無く、やっと終わったという安堵感の方が大きかった。校長先生の「本当に残念な負け方をした」という翌日の朝礼でのお話は、空しく耳に響いた。

以上のようなことを、最近、小学校の出前授業で話すようになった。戦争を体験した先生がおられなくなった今、このような話を子供達に伝えるのが自分達の使命と考えてのことである。子供たちは、自分達の全く知らなかった世界の話を、皆一様に驚きながら聞いてくれる。「戦争はもっと大きな国が始めたものと思っていたら、日本が始めたと聞いてびっくりした」という意見も多いが、それよりも、殆どの子供が言うのは「なんで日本の国民は戦争をしてはいけないということを言えなかったのだろう」という疑問である。当時の日本の情勢を知らない子供たちにとっては、当然の意見ともいえるが、筆者は、それよりも、今の小学生は民主主義の根本が分っているのだと理解したい。その「民主主義の根本を大事に思う心」を何時までも持ち続けて、必要なときにはいつでも実践に移せる人間に育てて欲しいと願っている。

米軍による原爆の投下については、いろいろな考えがあろう。ただ、今、筆者が強く思うのは、それは単なる結果論と笑う人がいるかもしれないが、日本があと 10 日早くポツダム宣言の受諾を決めていたら、原爆は落ちなかったのは間違いないということである。大量の非戦闘員に一瞬にして悲惨な運命をもたらすという悲劇は起こらなかったはずである。落とされた側は勿論のこと、落とされた側も、将来に亘って大きな不幸を背負うということは、避けることが出来た。戦闘員の被害も、戦争の早期の終結でかなり減らせたはずである。筆者の住んでいた丹比村郡戸は全戸数 100 足らずの小さな村落であったが、その約 20% の家の若者が戦争で命を落としている。

最近、筆者の生家である羽曳野市の畑田家住宅で催した文化フォーラムで武者小路千家の家元千宗守氏が、戦後かなり経って自分の父から聞いたこととして、大略次のような話をされた。「昭和 18 年のある日、近衛家所有の京都の陽明文庫の茶室で茶事をするので、1 人で手伝いに来ていただきたいという依頼が近衛文麿氏から父にあったそうです。会席もある正式の茶会なので、1 人でやるのは大変だなと思いつつ、それでも絶対 1 人でということなので、普段の何倍も苦勞して準備をし、当日のお客様を待ったということです。主客は昭和天皇の弟君である海軍におられた高松宮で、あとは、外務省の高官たち、ふすま 1 枚を隔てて聞こえてきた話の内容は、日本国は、どこの国を通じて、連合軍に降参を申し込むかという話だったということなのです。それを聞いて父は、絶対 1 人で来て欲しいと言われた意味がはじめて、よく分かったと申しておりました」と。

昭和 18 年というと、アッツ島の玉砕はあったとはいえ、国民の多くは、未だ日本の勝利を信じていた頃である。日本の上層部の人達が、ここまで状況判断が出来ていたのなら、もう少し早くに戦争を終わらせる手立てを講じて欲しかったと、痛切に思う。それは大変難しいことであったとは思いますが、努力して欲しかった。開戦の 5 ヶ月前、昭和 16 年 9 月 6 日の御前会議で、昭和天皇は外交による局面打開を強く要望され、「四方の海みなはらからと思う世に など波風の立ち騒ぐらむ」という明治天皇の御製を読み上げられ、和平への希望を強調されたという記録がある。大権すなわち国土・人民の統帥権をお持ちの天皇の発言である。本来ならその趣旨に沿った外交交渉が進展し、開戦が阻止できればよかったのであるが、せめて昭和 18 年の段階で昭和天皇のこの発言に思いをいたし、早急な事態の打開が出来ておれば、と残念でならない。いま、われわれが、しなければならないことは、当時の天皇の大権に相当する権利と義務を持った国民の一人一人が、その能力に応じて、国の進路を誤らないために、真実の認識とそれに基づく実践に努めることである。それが、かの陸軍中尉の「世界の平和のために勉強せよ」に応える道であると信じている。

＜編集を終えて＞ 年報 No.9 をお届けします。皆様から頂いた感想文から、保存会の幅の広い、活発な活動の様子をくみ取っていただけたと思います。当主の畑田さんの回想文も合わせて掲載いたしました。畑田弘美さんが、このほど尼崎市芸術奨励賞を受賞されました。おめでとうございます。皆様のお力添えを感謝しています。(S.N.)

## 畑田家住宅活用保存会の教育・文化活動に期待する

日本コルマー株式会社代表取締役 神崎 茂



去る11月14日、畑田先生のお招きにより、国の登録文化財に登録されている羽曳野の畑田家住宅で行われましたお茶会に初めてうかがいました。お茶を頂いたあと、茶道武者小路宗家家元の講演をうかがう機会を得ました。戦国時代を経て太閤秀吉の時代にも天下統一の勢力争いが続きその政治の真只中で武士でもない堺の町人であった千利休が切腹してその生涯を終えたいきさつについて詳しくお話を聞くことが出来ました。漠然とした理解しかなかった歴史上の事実について当時の政治のリアリズムのなかで起きた凄まじい現実がよく理解できたように思いました。立派なお話を聞かせて頂いたことに感謝致します。

畑田家当主の畑田先生と知り合ったのはロータリークラブでのつながりによるものです。ロータリークラブは知り合いを増やすことを大事な目標の一つとして活動する今日のNPO

の草分け的団体です。100年以上の歴史と伝統があり世界中に120万人の会員がおり、日本には9万2000人のメンバーがいます。ロータリーの交流のなかで先生と知り合うことが出来、又この日の会合に出席して畑田塾の皆さんとの出会いが生まれました。畑田先生はその生家である畑田邸を会合の場所として提供され江戸時代から始まる庄屋屋敷、古い住宅の保存活動を行いながら畑田塾を主宰され、多くの人々を集めて様々な文化活動の中心となって活躍されていることに感銘を受けました。

又、先生の活動の一つに出前授業があります。小・中・高校生を対象に科学者としての立場からの分かりやすいお話を通じて次世代の人々に大なる教育的影響を与えてこられました。私も先生に教えられて昨年より或る地方の中学生を対象に出前授業「何故勉強が必要か、何故働くのか」について一職業人の立場から延べ約300人に講演をし、地元教育委員会の要望に応じて今後も続けてゆくつもりです。私としても得るものが多く、やり甲斐を感じています。やり甲斐は人生の生き甲斐でもあります。昨年9月突然所謂リーマンショックが発生し世界中が経済恐慌寸前の状態に陥り、様々な困難に直面しております。最近の日本政府の発表によると向う2年間このデフレが進行すると言っています。物価下落、失業率上昇、企業業績のさらなる悪化が懸念されます。世界唯一の超大国アメリカによる金融資本主義のあくなき利潤追求型パラダイムも終焉し、世界中の人々が今後何を目標とすべきか途方に暮れています。これからの目指すべき目標はこれ以上の豊かさの追求ではなく、環境、医療、介護、教育、文化、芸術等の分野の改善、育成であって、これらは利潤追求とは無縁の世界です。又、個人の生活では知識、情報、人間関係の充実がよりよく生きるための必須の要件となると思われます。

畑田家住宅活用保存会の子供達を対象とする畑田塾を含む教育・文化活動はまさに時宜を得た素晴らしい働きであります。地元の人々を中心とした多方面の方々の参加を含めて、心の居場所としての畑田塾、教育文化フォーラムの益々の発展に期待し、参加させて頂きましたことに感謝申し上げます。

### 平成21年4月1日から平成22年3月31日までの収支決算

収入の部	
前年度繰越金	56,758
会費	583,000
寄付金・協力金	176,000
雑収入	19,700
合計	835,458
別途積立金	100,000

支出の部	
講師謝礼	320,000
資料・年報・出版作成費	336,705
通信費（郵送料、振替手数料等）	70,330
事務用品費	18,625
雑費（講師接待他）	52,840
次年度繰越金	36,958
合計	835,458

事務局 〒583-0874 大阪府羽曳野市郡戸1-1 畑田 勇 電話072-955-4380  
会費の納入は郵便振替(口座番号 00980-2-41107 加入者名:畑田家住宅活用保存会)へお願いします。